

第93話 (71頁) 石

ある貧乏人が、お金持ちのところにやってきて、ほどこしをもとめました。お金持ちは、何もやらずに、「あっちに行け!」と言いました。けれども、貧乏人は立ち去りませんでした。するとお金持ちは、はらを立てて、石ころを拾うと、貧乏人に投げつけました。貧乏人はその石ころを拾って、ふところにしまうと、こう言いました。

「あいつに、仕返しができる時まで、この石ころをとっておこう。」

そのときが、やって来ました。お金持ちが悪いことをしたのです。お金持ちは、もっていたものを、すべて取りあげられて、刑務所に引かれて行きました。その途中、貧乏人がお金持ちに近づいて行って、ふところから石ころを取り出すと、大きく手をふりあげました。それから、ちょっと考えて、石を地面にほうり出して、こう言いました。

「こんなに長いあいだ、石ころをとっておいたのは、むだなことだった。あいつが金持ちで、力があつたときは、おれは、あいつがこわかった。だが、こうなってみると、あわれなものだ。」

「すごくドラマティックな筋立てだ。文楽の舞台をほうふつとさせるように読んだよ。」

「なのに、登場人物は貧乏人とお金持ちの二人だけ。だからこそ、引き立つのか。」

「圧巻は、刑務所に引き立てられていくお金持ちを貧乏人が見つけ、近づいて石ころを持った手を大きく振り上げる場面。観客（読み手）は手を握り、息をのみ、目を凝らす。」

「盛り上がった頂点で、貧乏人は手を下げ、石を放り出す。観客は緊張が解けて大きく息を吐く。とまあ、そんな展開かな。」

「貧乏人はお金か物か、どんな無心をしたのだろうか。」

「どんな無心にせよ、石を投げて追い払うなんて大人げない。ロシア人は恵み心が深くて、求められなくても施しをするのが一般的なのに、ね。」

「お金持ちはそのころから悪いことをしていたのか、と勘繰りたくもなる。」

「貧乏人は投げつけられた石を拾って仕返しを誓う。その気持ちも分かるというものさ。」

「その好機がめぐってきたとき、お金持ちはどんな悪いことをしていたのか。全財産を没収され、懲役まで科されるとは、相当な大罪を犯したのだろう。いろいろと想像したくなるが、『悪いことをした』としか書いてないのは、いかにもトルストイらしい。」

「ここで二人の立場が逆転し、貧乏人が優位に立つ。『こうなってみると、あわれなものだ』と貧乏人がつぶやいたのを、お金持ちはどう聞いたか。」

「お金持ちがあのとときの貧乏人か、と気付いた方が劇的だ。それだけ、お金持ちの哀れさが

深くなってくるよ。」

「この貧乏人の言葉で締めくくったのは、さすが、というか、効果抜群だ。」

「二人が立場を代えて出会うまでに、どのくらいの歳月が流れたのだろうか。長ければ長いほど、待っていた甲斐があるけど、あまりに長すぎては懐に入れて持ち歩いていた石ころも丸まってしまうかも（笑い）。」

「5年ぐらいが適当な気がするなあ（多くが頷く）。」

「現実的には、貧乏人も貧乏人だ、という気もしてくる。家族もいたなら、少しは暮らしが上向くぐらいのことはできなかったのか、と言いたくなるよ。」

「それはそれとして、貧乏人はずっと貧乏人でいてくれないと、この話は成り立たないし、その分、効果が薄れてくる。そのことはみんな認めるんじゃないか。」